No.72
January 31st, 2022

NEWSLETTER

国際音楽資料情報協会日本支部

ISSN 2432-6135
(online)

International Association of Music Libraries, Archives and Documentation Centres Japanese Branch

【特集】追悼・村井範子先生

【目次】

追悼・村井範子先生
・母と私の成長（村井純）p.1
・村井範子さんの想い出（金澤正剛）p.2
・哀悼の辞（平尾行藏）p.4
・音楽図書館の世界と日本との
　繋ぎ手だった村井範子先生（松下鈞）p.5
・成城の、たおやかな時間のながれ
　―ささやかな追想―（美山良夫）p.7
・フェリス女学院と村井範子先生（秋岡陽）p.8
・村井範子先生に感謝を込めて（中西紗織）p.10
・村井範子先生 略年譜・主要業績等一覧 p.11

事務局だより p.15

IAML 日本支部第 46 回研究例会での
村井範子先生（1924-2020）
（2009.6.7 撮影）

母と私の成長

村井純

私にとっての最初の両親の思い出は、異国の写真と絵葉書、そして、時折送られてくる見たこともないおもちゃや、夢のように美味しいお菓子だった。

私が幼稚園に通う二年間、両親はそれぞれの分野で米国財団の研究基金を獲得し、研究に専念するために私と六年上の兄を日本に置いて渡米していた。二年ほどの期間、私と兄は叔母に育てられた。小学校に入学し、羽田に降り立つ母を迎えに行ったとき、写真を何度も見て覚えていた母が、濃い赤のコートを着ていて私を抱きしめてくれた。

中学の頃、兄はともかく可愛い盛りの私を置いていくのはさぞかし辛かったのではないか、と母に聞いたことがある。笑って答えると思っていたら「幼児の時期はかわいいけど、思春期の今からの時期に一緒にいることのほうが大切だと思った」と真剣な顔で話してくれた。おそらく自分の決断をいつどのように私に説明するか準備していたのだろう。

家庭では母は誰より威張っていたと思う。それが証拠に、母はしばしば「外で他の人と会うときは、控えめでやさしいミセスなの」と主張していた。

母は、私に対して言葉を書く機会には、「楽しく！」とだけ書いてくれていた。しかし私は後に「楽しく」生きすぎて、まったく成績が悪い大学生となった。

YMCA の野外教育の指導やバンド活動などに夢中で落第を繰り返したので、いよいよ単位不足で放校か、という瀬戸際になった。生まれて初めて、母に「なさけない」と泣かれてしまった。究極の親不孝である。「両親の子供のときからの教育投資に応えていない」と痛烈に思った。なんとか踏みとどまり卒業する時に、「自分はやっぱり親の教育

の期待に応えていない」と進学することにした。修士を取得しても、「まだまだだめだ」と博士課程に進学した。

母は英文科を卒業後に、音楽科も卒業し、大学で積極的に研究に打ち込んでいた。前述した留学の際も、音楽の研究での資金獲得をして渡米したし、その後のヨーロッパ、プリンストンへの滞在も、必ず音楽研究者としての立場で教育学者の父に同行していて、研究者としての自立性に関してかなり強い意志を持って活動していた。

私の研究生活の前には、母が見せてくれた研究者としての背中があった。

（村井家次男・慶應義塾大学教授）

編集部注：
本稿は『文藝春秋』96 巻 8 号（2018 年 8 月）p.433 に掲載されたものを、今回の追悼特集にあたり、若干の誤記を修正の上で転載したものです。転載をご快諾くださった村井純様と文藝春秋様に御礼申し上げます。

若き日の村井範子先生
画像提供：村井家

ロンドン滞在中、バッキンガム宮殿前にて（1959 年）
画像提供：村井家

村井範子さんの想い出

金澤正剛

私が初めて村井範子さんにお会いしたのは 1958 年秋のことである。その 1 年半前に ICU（国際基督教大学）を卒業したところで、ハーヴァード大学の大学院に進学することになり、フルブライトの奨学金を得たことからボストン近郊のケンブリッジにある大学院生用の寮に住むことにった。大学院音楽部の新入生は必須科目として、音楽学序論を受講することになっていたが、その他に外部から来た学生は西洋音楽史概論を受講することが定められていた。その年私は久々に外国から来た学生と聞いていたので、最初の授業で私の他にもうひとり日本人のご婦人が居られたのでびっくりした。それが村井範子さんだったのだが、聞いてみると、「主人がハーヴァードに招かれて来ることになり、私もついてきてしまったのだけれど、何もしないのはつまらないから、音楽の講座を聴講することにしたの」という説明だった。ただし後で解ったことであるが、範子さんは正式にロックフェラー財団の奨学金でハーヴァードに来られたということだった。ちなみにご主人の村井実さんは慶応義塾大学の教授で、著名な教育学者として知られている。

その頃のボストンには日系人はともかくとして、滞在する日本人の数は極めて少なく、私が聞いたところでは約 27 人しかいないということだった。村井さんたちは他の日本人とも付き合っておられたようだが、大学院 1 年生の私は寮と音楽部の建物の間を行き来するのがほぼ日課となっていたので、日本とのつながりはほとんど村井ご夫妻のみという生活を続けていた。範子さんからは、地下鉄でボストンに向かう最初の駅のセントラル・スクエアには日本製の道具や食品を売る店があるとか、歩いて 10 分ほどの隣町のサマーヴィルに新鮮な魚のマーケットがあって、刺身にしていい魚を売っている、などということも教わった。早速サマーヴィルのマーケットに行って見ると、なるほど新鮮な魚が並んでいたが、ふと見ると傍らに油の乗ったマグロの切り身（つまりトロ）が投げ出してあったので、それが欲しいと言ったら、そこはどうせ捨ててしまうのだから、ただでやるよと言ってもらってきたこともあった。ところがそのうちに、どうやら日本人はマグロの脂身が好きらし

いと気がついて値段が付くようになり、それがどんどんと上がっていってしまったことを憶えている。

ある時範子さんとボストンに行こうと、地下鉄のプラットフォームに降りて行ったところ、そこにもうひとり日本女性が立っておられた。まあ暫くと挨拶の上紹介されたのが、オルガニストの林佑子さんであった。林さんはちょうどニューイングランド音楽院を卒業されるところで、卒業演奏で弾くことになっているハーヴァード大学構内にあるブッシュ・ライジンガー美術館のオルガンを弾いて帰る途中だったらしい。もし時間が許せば聴きに来て頂戴と言われて、私は私の寮からほんの５分ほどのところにある美術館で林さんの演奏を初めて聴いた。以後林さんとは生涯を通じて親しく付き合うこととなるが、私自身が深くオルガンに関わり、日本オルガン研究会の発足や、美濃白川（飛騨白川郷ではなく）の白川・イタリアオルガン音楽アカデミーの活動、さらには母校 ICU の教会のオルガン設置に関わった出発点がまさにここにあったと言って良いように思う。

そのほか私の留学最初の２年間、実にいろいろなことで村井夫妻にはお世話になった。私の貧乏生活を見かねて、折に触れて食事に招いて下さったし、ある時学生寮内での自炊禁止令が出た時には、お宅に伺って、一週間分のおにぎりやゆで卵を作らせていただいたこともある。音楽部の教授たちとも親しく付き合っておられたが、それは抜群の英語の会話能力を持っておられたからで、範子さん自身から「津田塾で勉強したので、会話には自信があるの」と聞いた覚えがある。特に私の修士論文の担当教授であったジョン・ウォード先生が日本びいきであったことから、一緒に先生のお宅へ伺って、「日本食パーティー」の用意をしたこともあった。今となっては実に楽しい思い出である。

1962 年に博士課程資格試験に合格した私は、その後１年間ヨーロッパで研究するための奨学金を得たが、当時日本ではヴィザを４年以上延長することはほとんど出来ないということから、一度日本に帰国して再発行してもらってからヨーロッパに向かうことにした。せっかく帰国するのだからと村井夫妻に連絡したところ、「紹介したい人が居るから、家に来ない」と招いてくださって、事実上家庭パーティーを企画して下さった。成城学園の傍にあるご自宅に伺い、古楽研究家で、後に国立音楽大学学長になられた高野紀子さんや、ヴィオラ・ダ・ガンバ奏者の大橋敏成さん、さらにご子息二人にもお目にかかって、楽しい時を過ごしたことを憶えている。

さらに 1966 年に私が博士の称号を取得して帰国した時にもいろいろな方々に紹介して下さった。まず連れていかれたのが遠山一行先生のお宅だったが、奥様の慶子さんが私と同い年で、少女時代に私が今も住んでいる西片に住んでおられたということで話が盛り上がった。そういえば私の家からそんなに離れていない処に慶子さんのご実家の「藤村家」の大きなお屋敷があったなということも想い出した。またヘンデル研究家の渡部恵一郎さんや、東海大学の松前紀男さんに紹介して下さったのも範子さんであった。

その他村井範子さんに関しては話題が尽きないが、最終的に私にとって最も重要なことは、妻の千鶴子と出会う機会を作って下さったことである。後で知ったことであるが、それは範子さんと遠山慶子さんのおしゃべりから始まったらしい。おしゃべりの中で私たちの話題が出て、「あの二人うまくいくのじゃない、会わせてみようよ」ということになったという。それを知らずにある日慶子さんから夕食に誘われ、行ってみたらそこに千鶴子が居た、というわけである。そんなことから私たちの結婚式では村井夫婦が花婿側の、遠山夫婦が花嫁側のという、二重仲人の豪華版になった。

振り返ってみれば、ハーヴァード大学での出会いから数えて 60 年以上のお付き合いであったことになる。その間常に親しくしていただいたことを想いだしつつ、心からご冥福を祈る次第である。

ウォード教授夫妻来日の際、村井家にて（1969 年春）
（前列右から村井実教授、次男純さん、ウォード夫妻、
後列右２人目から大橋敏成氏、範子さん、金澤、長男成さん）
画像提供：村井家

（国際基督教大学名誉教授）

哀悼の辞

平尾行藏

村井範子氏（1924-2020）は、私が（財）遠山音楽財団附属図書館（以下遠山音楽図書館と略す）に就職した 1971 年 3 月には、既にそこにおられ、はじめてお目にかかりました。70 年代というと、第二次世界大戦が終わり「もう戦後ではない」と言われ、日本の躍進が始まっていました。IAML の創設は戦後すぐの 1949 年のことで、その後四半世紀を経て世界の音楽出版活動も盛んになり、楽譜、音楽書、音や画像の記録物その他音楽に関連する資料が多く出版されていました。

遠山一行氏により遠山音楽図書館が創設されたのは 1966 年のことで、財団が設立された 1962 年から資料集めに奔走したのが、その直前に留学経験のあった皆川達夫氏であり平島正郎氏でした。その頃、日本の音楽大学でも集められていた古典派とロマン主義は避け、他では目にする機会の少ない中世とルネッサンス期の西洋音楽と日本の現代音楽に焦点を絞って収集作業がはじめられていました。

日本の復興とともに蔵書数は増え、海外音楽出版各社の出版カタログが毎月山のように届けられました。当時の海外出版物は価格が高く、収集対象としている楽譜は目が飛び出るような値段でしたが、個人で手が出なくとも遠山音楽図書館には購入する予算がありました。1968 年から選書をされていたのが村井範子先生でした。選書の作業は音楽学の知識がなくては難しく、音楽学者である彼女の担当でした。

資料が届くと棚に並べなければなりません。遠山音楽図書館では分類で配架し、著者記号にカッター＝サンボーン表、分類表にはその頃できたばかりだった、日本十進分類法の音楽の部分 760 を音楽専用に改訂した小川昂氏の音楽分類表が使われ、分類作業をされていたのが村井範子先生でした。選書と同じく分類をするには、音楽学の知識がなければなりません。

村井範子氏は、1973 年 3 月までの 5 年間の間に遠山音楽図書館の礎を築く役割を果たされました。その後任が故岸本宏子氏です。

IAML はいくつかの部門・委員会等を持って活動し、音楽分野の所在目録、雑誌記事索引、図像目録、出版物目録、専門誌等を出版しています。Fontes Artis Musicae、RISM、RILM、RIdIM、RIPM などの中心をなす出版活動のほかに、教育機関や放送局の音楽資料館、視聴覚資料、目録法とメタデータ、サービスと研修等それぞれの研究部会があって先駆的な仕事をしていました。

医学、法律、音楽の 3 分野は図書館学の中で独立した専門分野をなしているということを地で行く活動をしていたのが IAML でした。

村井範子氏は、日本が国際社会に復帰してからほとんどすぐの 1960 年代初めに、IAML に注目するという慧眼の持ち主でいらっしゃいました。津田塾専門学校（現津田塾大学）で当時は敵国語であった英語をマスターされ、広島に帰って原爆で大怪我をなさった父上を看護され、結婚をして 2 児の母となられてから、さらに東京藝術大学に入り直し、音楽学者となられました。1958 年にロックフェラー財団の援助を受け、足掛け 3 年にわたって主にアメリカで学ばれ、ヨーロッパでも研鑽を積まれました。そこで語学を有効に使われ、30 歳代半ばの若さで縦横無尽に活躍されました。それから 20 年近くを経た 1979 年、村井範子氏は、遠山一行氏、渡部恵一郎氏等とともに IAML の日本支部を設立なさいました。

その名称を単に国際音楽図書館協会とはせず、あるいは当初名乗っていた国際音楽文献学協会でもなく、国際音楽資料情報協会とされたのには、どんな理由があったのでしょうか。日本語で「図書」館というと――最近では音や画像による記録物を集めてもいますが――、「言語による記録物」の集積所という意味が強く、それらだけでなく、音符と静止画像そして音や動画等による記録物を表すことばとして「音楽資料」という表現に行き当たりました。福島和夫氏のご意見もあり、「文献」学ということばが文字情報だけを意味していて、これからの時代には合わず、音楽特有の資料を表すことばではありません。「情報」はドキュメンテーション・センターを対象にしていて、「音楽資料情報」ということばはまさに打ってつけのことばでした。それで図書館や文献ということばを使わず、国際音楽資料情報協会という最終決定を下すにあたって、事務局長が果たされた役割もあったのではなかったかと想像いたします（アーカイブとドキュメンテーション・センターが IAML の名称

の後ろに加わったのは、創設から数年経った後の事です)。

日本には、音楽大学を中心とした音楽図書館協議会 MLAJ が既にあって（1971 年設立)、活発な活動を展開していました。しかしそれは団体による加盟でした。IAML を動かしている欧米各国の人々は、音楽学で学位をとり図書館学を修めた人たちで、その資格は法律に基づいています。それに相当する法律は日本にはありませんが、彼女はそういう相違を認識しつつ、MLAJ とも協議して、個人加盟の団体として IAML の日本支部を創設されたのではないかと推測しています。

IAML は音楽図書館の研究者が一人では抱えきれないほど大きな広がりをもった活動を展開していて、日本でもそれに対応することができる複数の人たちが必要な時代になってきたと考えられていました。彼女に促され私も蛇尾に付して、月 1 回開かれている草創期の国際音楽資料情報協会日本支部の例会で発表させていただく機会がありました。

1988 年の IAML 東京大会は、明治以来の西洋の音楽の受容を通し、社会体制の違いを超えて日本が国際的に認められるという役割を果たしました。それを支えていたのは IAML 日本支部でした。

村井範子氏は、J.S.バッハ以前にも数百年以上にわたって音楽があったことを明らかにする H.M.ミラー著『音楽史』『新音楽史』を東京藝術大学同期の音楽学者たちと翻訳され（20 万部の売り上げ！)、音楽学者として活躍されるかたわら、国際音楽資料情報協会日本支部の創設に尽力され、音楽の図書館員としても大きな足跡を残されました。今の観点からすると、女性の地位向上にも先駆者としての働きをされました。ここに謹んで哀悼の意を表します。

（元慶應義塾大学メディアセンター本部事務長）

音楽図書館の世界と日本との繋ぎ手だった村井範子先生

松下鈞

村井範子先生のご逝去から早くも 1 年が経った。村井先生の訃報に触れた時、私の記憶の中で MLAJ（音楽図書館協議会）草創期における村井範子先生との交流の数々が思い出され、先生がわが国の音楽図書館界に与えてくださった影響の大きさにも気づかされた。村井先生をめぐる懐かしいエピソードの数々が蘇ってきた。

村井範子先生に初めてお目にかかったのは、1971 年 6 月に MLAJ が創設され、私が事務局長を仰せつかってから以降のことだ。1973 年、MLAJ が RILM 日本国内委員会の構成メンバーとなった。それが IAML との関わりの始まりだった。1974 年の IAML エルサレム大会の直前、村井先生から MLAJ 事務局長として日本の音楽図書館の現状に関するレポートを提出するようにとのお達しがあった。あたふたしながら、つたない英文レポートを纏め、それを村井先生に委ねた。1974 年 12 月の MLAJ 理事会（当時は総会を理事会と称していた）には IAML 個人会員である NHK 資料センターの上法茂さんをお招きし、IAML と IASA の機能、組織と運営についてお話を伺った。村井先生は IAML 大会の前になると必ず電話をかけてこられ、日本の音楽図書館に関係するあれこれの情報提供を要望され、私はその都度資料作成に四苦八苦したものだった。

1975 年 12 月の MLAJ 理事会には村井先生をお招きし、その年の IAML モントリオール大会のトピックスについて伺った。村井先生と当時のフェリス女学院大学音楽学部長の佐藤馨先生はともに東京藝術大学の学生時代、遠山一行先生の教え子だったということもあり、1977 年にはフェリス女学院大学山手図書館別館の MLAJ 加盟がトントン拍子で実現した。

村井先生は電話魔だった。なにか用事を思いつくと、昼夜にかかわらず電話をかけてこられた。会話の中で何度も繰り返される『ですからねぇ』というフレーズはいまでも耳の中に蘇ってくる。その電話攻勢を畏れて居留守を使ったことさえもあった。

村井先生は、1978 年、リスボンの IAML 会議で、かねてからハラルト・ヘックマンさんやバリー・ブルックさん

らの要請もあったIAML日本支部の立ち上げを発表された。そのことを私は知らされていなかったが、村井先生とはIAML 日本支部を創設する可能性について頻繁に議論する機会があった。当時、わが国には個人的に参加されていた村井先生や上法さんらIAML 会員と、IAML の機関誌 Fontes Artis Musicae の定期購読のため便宜的に IAML に加盟している音楽図書館などの機関会員との２種類があった。その頃、MLAJ は音楽図書館員や大学教員や音楽資料に興味をもっている学生や一般の方などを賛助会員として組織化し、音楽図書館学研究の振興を図る方針のもと、1977 年から「音楽書誌学研修会（音楽図書館学講座）」と称する研究セミナーを開催していた。IAML 日本支部設立の動きはそのような状況の中で興ったのだった。村井先生が心配されたことは、IAML 日本支部と MLAJ とが個人会員を奪い合う構造になってしまうことだった。こうした動きの中で村井先生からの電話攻勢があったことは言うまでもないことであった。

1979 年７月、IAML 日本支部は個人会員、MLAJ は機関会員を中心とする棲み分けが確認され、IAML 日本支部は創設された。支部が設立されてからしばらくの間、例会や研究会は村井範子先生の伝手で六本木の国際文化会館の小会議室で開催されていた。小会議室はうす暗く狭い空間だったが、ロビーやコーヒーショップや庭園は素晴らしい雰囲気で IAML 日本支部例会に参加するのが楽しみだった。

IAML 東京会議 1988 の開催は、突然降って湧いた話だった。1986 年、IAML ストックホルム大会では、そこに参加された村井先生、柘植元一先生らが 1988 年の東京開催を受諾されたとのことだった。俄かに IAML 日本支部、MLAJ、（財）日本近代音楽財団とで実行委員会を構成し、委員長に遠山一行先生（IAML 日本支部長、日本近代音楽財団理事長）、委員長補佐には村井範子先生（IAML 日本支部）、副委員長にはホアキン・M・ベニテズ先生（MLAJ 理事長）が就任した。事務局長は岸本宏子さん（IAML 日本支部）、事務局は林淑姫さん（（財）日本近代音楽財団日本近代音楽館）と私（MLAJ）が担当し、開催準備にあたった。そのほかにも多くの方々がそれぞれ重要な役柄を担われ、準備と運営に携わった。会期は 1988 年９月４日から９日まで。会場は東京藝術大学。開催規定により、会場から徒歩１０分以内にＡからＣランクのホテルを確保することになった。東京藝術大学から徒歩１０分圏内にＡ、Ｂ、Ｃランクのホテルを確保するのはなかなか難しかった。Ｃランクのホテルには池之端の１階がパチンコ屋というホテルも含まれていた。開催がひと月先に迫ってきた８月初めのある日、皇居前のホテルから私宛に電話がかかってきた。「9 月 3 日から 9 日まで 7 泊 8 日のご予定で、30 室のご予約をいただいておりますが。お泊りになるお客さまのお名前と、お部屋割りは決まりましたでしょうか？」突然のことに驚き、回答を数日保留にしていただいた。その間に、ホテルの予約をなさった方が判明した。その方によると、例年の大会では開催都市の全面的な協力があって、主要なメンバーはグレードの高いホテルでの宿泊やパーティなど、素晴らしい歓待を受けている。東京大会でも当然そのようにするべきだ。会場から一番近い A ランクのホテルは皇居前のホテルなので、事前予約をした。とのことだった。大変心苦しいがホテル側には平身低頭でキャンセルをさせていただいた。

村井範子先生は、IAML のコミュニティの中で、わが国の音楽図書館の動きを世界に紹介され、世界の音楽図書館人の目をわが国に向けさせようと努力された。また、村井範子先生をハブとしてわが国の音楽図書館と世界の音楽図書館が結ばれたことも事実である。私自身、村井範子先生によって音楽図書館に関する国際的視野が開かれた。そのことに深く感謝している。

IAML 東京会議 1988 の開催を経て、その後のわが国の音楽図書館界の国際化の進展を自問自答してみると忸怩たるものがある。しかし、ここ数年、IAML 日本支部構成メンバーは少なくなったとはいえ、だいぶ若返り、村井範子先生が先達のお一人として拓かれた、わが国の音楽図書館界の国際化は徐々に進んでいるようでもある。

村井範子先生、安らかにお眠りください。

（MLAJ 元事務局長）

成城の、たおやかな時間のながれ
―ささやかな追想―

美山良夫

「ねえそうでしょ、美山さん」。村井範子先生から、もっとも多く聞いたのはこのフレーズです。間違いなく。先生からの電話は、いつも相当長く、ご自身が進めようとされている事柄についてひととおり、ときには繰り返し説明されると、そのたびに、あるいは途中でも、このフレーズが登場します。すると、私なりの考えを言う気持ちがあったとしても、すぐに萎えてしまいます。もっとも、村井先生のお話は、いつも中庸をえたものでしたから、私から何か申し立てる必要はありませんでしたが。

村井先生の語り口は、このたび上梓された『音楽学研究物語』にもとてもよく表れていて、拝読しながら先生が目の前にいるような気持ちに何度もなりました。そのうえ、IAML 日本支部の立ち上げの頃についても、詳しく語られています。随分ながく会員でありながら、そのくせ然したるお手伝いをしてきた訳でもない私としては、その情熱にあらためて感服させられました。会員に誘ってくださったのも、たしか村井先生でした。

お誘いを受け直ちに入会したのは、はじめに紹介したフレーズ故ではなく、私自身の原体験のためです。思えば半世紀も前、右も左もわからず図書館でまごついている留学間もない私を、手短な言葉でサポートしてくれたのはシモーヌ・ワロンさん（フランス国立図書館音楽部門）。ご本でお名前は存じ上げていた方が、わざわざ私ごとき若造のためにという気持ちになったものです。それは、研究者は音楽図書館と図書館員には頭があがらないのだ、といった刷り込みとなりました。

もうひとつは、帰国後数年して東海大学の講師をしていた頃、1984 年から翌年にかけてですが、遠山音楽財団附属図書館蔵書のうち、日本の洋楽資料を除く資料が慶應義塾大学に寄贈されることになり、受入れ側教員の手伝いをしたためです。寄贈の時点で資料の新規購入が止まり、閉ざされたコレクションになってしまうことを、いかに回避するかに注力していたとき、村井先生とのお付き合いがふえ、何度も電話をいただくようになりました。

IAML 年次大会の東京大会（1988 年）への思いとともに、いまも強く印象に残っているのは、千駄ヶ谷駅前に建てられる津田ホール。その建築と運営への情熱です。ご自身の思いを語られ、私に同意をもとめておられるようでした。音楽への、母校への思いが相乗されておりました。ご意向のすべてが反映できたわけではなかったようですが、東京大会と同じ年に、槇文彦さん設計の品格のあるホールが完成しました。

『音楽学研究物語』にも登場する神戸愉樹美さんらにお願いし、 遠山音楽財団附属図書館旧蔵資料を用いて、出島史料館で聴かせるために、長崎出島に響いた音楽の再現演奏を録音（1998 年）するなど、津田ホールに思い出をもつ者として、また村井先生の熱意を記憶する者として、同ホールの閉館と解体は残念でなりません。

IAML では支部としての活動のほかにも、会員の自主的な活動がありました。そのなかで、音楽図像学の研究会に入れていただいた私は、成城の閑静な住宅街にあった先生の邸宅でおこなわれた集まりに、なんども足を運びました。ここでも私は大した発表はしなかったのですが、情報交換や、先生が語るバリー・S・ブルックさん（この分野の泰斗のひとり）のことを伺いながら、陽光差し込む大きなサロンの午後、そのたおやかな時のながれを思い出します。

何度か回を重ねるうちに、では年次大会の支部報告で話しては、となりました。どなたかが「今度はコモだから」と一言。北イタリアの風光明媚な湖畔の保養地なら引き受けるのではと、私の下心を見透かしたような発言をされたのがどなたかは思い出せません。1984 年 9 月はじめ、支部報告会場には、やはり鬼籍に入られてしまった岸本宏子さんが、私の下手くそな英語発表をいつでもサポートしますよと陣取っていてくれたのを思い出します。

その後も、慶應義塾大学のデジタルメディア・コンテンツ統合研究機構における南葵音楽文庫貴重資料デジタル化、昨今は和歌山県立図書館に寄託された同文庫の調査など、音楽資料と図書館、音楽研究と教育といった自身のしてきたことを振り返ると、みな村井範子先生が敷かれてきたフレームのなかに収まります。

ご本人からも、むろん『音楽学研究物語』でも、音楽研究と教育に関われる幸福を繰りかえし語っておられました。このように追想をたどってゆくと、なにか遠くから電話がかかってくるような気がします。研究、教育と IAML に貢

献できる幸せを語り、最後にまた、「ねえそうでしょ、美山さん」と言われるでしょう。きっと。

（慶應義塾大学名誉教授）

IAML アムステルダム大会で（1978 年）
（左より上法茂氏、美山良夫氏、井上公子氏、村井範子先生）
Fontes Artis Musicae, 48(1) (January-March 2001), p.45 より
（Maria Calderisi 氏撮影）

フェリス女学院と村井範子先生

秋岡陽

フェリスでは、明治の女学校の時代から、通常授業と並行して学べる音楽の選択授業を用意し、修了者に Certificate を発行していた。その伝統を引き継ぎつつ、戦後日本の教育制度改革を受けて、まずは専門学校音楽科（1947）が、そしてその後、短期大学音楽科（1951）が設置され、さらに 4 年制大学の音楽学部（1989）へと発展改組が行われてきた。

村井範子氏がフェリス女学院の短大音楽科に非常勤講師（音楽史・音楽学）として着任したのは、1960 年代の初め。その後、短大音楽科が大学の音楽学部になってからは、楽理学科の客員教授・学科主任に就任。開設間もない新学部の育成に力を注いだ。1993 年 3 月の任期満了後、それまでの 30 年に及ぶ功績にたいし、名誉教授の称号が授与されている。

30 年に及んだ在職年数について、氏は「私もいろんな学校で教えたけどね、でもね、フェリスがいちばん長かったわけよ。フェリスはほんといい学校だからね」と語っていた。かつて自身が学んだ津田塾の塾長で、尊敬していた星野あいが、明治期のフェリス和英女学校の卒業生だったことも関係している。「フェリスの卒業生だった津田塾の星野あい先生は、本当に素晴らしい先生だった」「星野あい先生がなさったことは大変立派だった」と繰り返し語っていた。

その意味でも、明治以来つづくキリスト教女子教育の歴史の積み重ねの中で、ひとつの重要な仕事をしたのが村井範子氏だった、とも言える。30 年間のフェリスでの教員生活を通じ、大勢の学生と接し、そのおおらか、大胆、反骨、そして常に前向きで力強い生き方で、多くの教え子たちを励ました。名誉教授になってからもオープンカレッジで約 10 年講師を続け、自宅で卒業生等の研修のための研究会を主宰。女性としていかに学び・生きるか力強く励まし、学校を出てからも学び研修し続けることの大切さを繰り返し説いた。

音楽の教育・研究にあたっては、狭い専門にとらわれず、広い視野に立つ姿勢を貫いた。それは、最近の音楽研究のスタイルとは異なる、黎明期のものだったともいえる。少

女時代、広島で著名な教育学者の長女として育ち、自由主義的な教育を受け、読みたいだけ本を読み、ピアノを弾き、瀬戸内の海を泳ぎ、のびのび育った。しかし戦争が激化し、自由は奪われ、価値観のおしつけが強まり、また、女性であるというだけで最高学府への道が閉ざされる理不尽に直面。当時は敵性語とされた英語の力を磨きに単身東京へ。津田塾で学び、在学中に敗戦を迎える。焼き尽くされた故郷。しかし戦後、英語力をいかして通訳などで働きつつ、やっと可能になった新制大学での音楽研究を志して大学受験、卒業後は大学で音楽史を講じる。

しかし日本語で書かれた良い音楽史の教科書がない時代のこと。自らの訳で、出版を計画する（H. M. ミラー『音楽史』[旧版]）。同書は、類書がなかった 1960 年代当時のベストセラーになった。もともと専門的な学術書ではなく、アメリカのカレッジの教養科目で使うための提要的な本だったが、あえてそうした本を選んだことが当時の日本での需要と合致した。

同書は、東京藝術大学音楽学部の楽理科２回生の友人だった松前紀男・佐藤馨と相談して東海大学出版会から刊行された。三者の「共訳」となっているが、藝大に入る前に津田塾専門学校英文科を卒業し、1958-60 年にはロックフェラー財団の奨学金を得てハーヴァード大学で音楽学を学んだ経験をもつ村井範子氏が中心的な働きをした訳本だった。同書は 2000 年に『改訂版 新音楽史』として再改訳され、改訳作業は秋岡が担当したが「新しい世代の学生たちに読みやすい本になるよう、以前の訳者に気を遣うことなく自由に改訳してほしい」と言われ、仕事がしやすかった。松前・佐藤・村井の三氏のおおらかな信頼関係の一端を垣間見た気がした。

東海大学出版会は「プレンティスホール音楽史シリーズ」（全８巻；村井範子・藤江効子・松前紀男・佐藤馨訳）も出版している。共訳者の４人は、巻ごとに主担当を決め、主担当者が訳出したあと全員が目を通し、問題点を検討するスタイルで翻訳作業を始めた。村井氏は『中世社会の音楽』(1972) を主担当している。なお『20 世紀の音楽』(1993) の巻が松前紀男・秋岡陽共訳となっているが、これは主担当の松前氏が東海大学学長となり時間がとれなくなったための応急措置で、残念ながらこの巻を通じて秋岡が村井範子氏と共同作業をすることはなかった。

フェリスでの村井範子氏は、音楽を講ずるだけでなく、「人間として大切なことは何か」を語り、教え子たちから卒業後も慕われた。励まされ、生き方が変わった卒業生も少なくない。人と人とのつながりを大切にし、積極的に世界を広げることのできる人柄は、IAML 日本支部の設立の原動力にもなった。自身の功績を誇らしげに語ることはなかったが、実はさまざまな人たちが氏を介してつながり、それぞれにまた新しい世界を広げることができている。あらためて感謝したい。

（フェリス女学院大学名誉教授、元学長）

村井範子先生に感謝を込めて

中西紗織

2021 年 1 月に村井範子先生との共著による『音楽学研究物語―村井範子が語る日本における音楽学研究のあけぼのとその時代』（芸術現代社）が出版されました。原稿が校了となったのは2020年11月初旬のこと。翌月ご訃報に触れ、先生がお元気なうちに完成したご本をお見せすることはかなわず、痛恨の思いでした。先生のお言葉の一つを思い出しました。「うまくいかないと思うことがあっても、それも経験としていくこと。それが生きるということ。その結果がプラスになることだってあるわけでしょ。」

今から 30 年近く前のある日、村井範子先生からお電話をいただきました。「あなた、津田塾大学ご出身ですってね。楽楽理会(らららりかい)の名簿でお名前を見たので、お電話いたしました」と。その時の明るく力強いお声は今も鮮明に記憶に残っています。「楽楽理会」とは東京藝術大学音楽学部楽理科及び大学院音楽学専攻の在学生・卒業生・教員の同窓会です。その名簿には「出身校」という欄があり、大卒者は楽理科入学前の出身大学名と学科を書くようになっていたので、津田塾大学英文科と書いたのでした。それが村井先生とお会いできるきっかけとなりました。ミラーの『音楽史』やプレンティスホールの音楽史シリーズなどで先生のお名前は目にしていたので、直接お目にかかれた時は、この方が村井範子先生！と感激したことを覚えています。

当時フェリス女学院大学の名誉教授でいらっしゃった村井先生は、オープンカレッジで「世界の音楽・日本の音楽」という講座をお持ちで、私は数年間アシスタントのようなことをさせていただきました。講座の中で私の専門分野の音楽学・音楽教育学と能に関するレクチャー＆ワークショップを担当する機会をいただいたことも何度かありました。講座の行き帰りに時折、先生からいろいろなお話を聞かせていただきました。その内容は、日本における音楽学研究のあけぼののこと、戦争中のこと、留学中の数々の冒険のこと、翻訳、教育、女性の社会進出、世界の平和など多岐に渡っており、あまりにも貴重な物語に溢れていました。それで、村井先生にインタビューをさせていただけないかとお願いしたのでした。「そう？面白い？そうね。日本における音楽学研究のあけぼのだからね。すべては adventure だったのよ。日本にまだ日本語の音楽学の専門書がなかった時代に、楽理科の同期生と翻訳したものが今もベストセラーなのよ」とご快諾くださり、インタビューが始まり、ようやく 2021 年初めに冒頭にあげた書籍を出版することができたのでした。

インタビューの中で、日本における音楽学研究のあけぼのに深く関わる、IAML 日本支部設立のことをうかがいました。ハーヴァード大学留学からの帰国の旅の途中、ロンドン、パリ、ミュンヘン、ローマなどに立ち寄られ、各地のライブラリで貴重なマニュスクリプトや音楽資料などに触れられたこと、資料の豊富さや各地の大学の教育・研究環境の豊かなこと、ヨーロッパのライブラリアンの多くはドクターで大学教授と同じような専門分野を生かして活躍していることなど、当時の日本からは想像できない、今の日本とも全く異なる状況について熱く語ってくださいました。「音楽というものは、一瞬一瞬消えていくものでしょう。だから、それを記録した楽譜、マニュスクリプト、そういうものが大切だったから、ライブラリが成り立ったわけよね」と、村井先生は「ライブラリ」の重要性について教えてくださいました。

ハーヴァード大学留学中に村井先生が指導を受けたジョン・ウォード教授から、イギリスに行くのなら、グローヴの音楽事典に出ている「イングランド」や「オクスフォード」といった地名などに関するところをよく読んでから行きなさいと言われ、そのようにしたら、あなたは初めてイギリスに来た人とは思えないと言われたそうです。1959 年から 1960 年にかけて、村井先生がイギリスに 2 ヶ月間滞在された折、ケンブリッジ大学音楽部の図書館のライブラリアンでエリザベス朝音楽の研究者でもあるヴラスト氏に、「私が far east の日本に帰ったら、西洋音楽の歴史を研究したいと思っても情報も何もなくて本当に困ったことで、日本で勉強するのは大変難しい。どうすればよいか」と相談なさると、それならこの IAML に入るとよいと言われたそうでした。それで、帰国されてから直ぐ個人会員として入会され、1979 年に日本支部が設立されたと聞きました。設立当時の皆様の大変なご苦労やご尽力のおかげで、音楽学研究の世界がさらに拡がったことに、私自身研究と教育

に関わる者として心から感謝の気持ちと敬意を表したいと思います。

「研究者になりなさい。研究者が一番社会に貢献できるし、自分自身も精神的に豊かになれる。私の父（長田新氏）がいつもそう言っていたの。研究者。いいでしょう。」先生のこのお言葉にも（長田新先生がおっしゃったお言葉ということも大変有難いです）どれほど励まされ、勇気をいただいたことでしょう。私事で恐縮ですが、村井先生は、私が博士号を取得した時も、大学の専任教員に採用された時も大変親身になって喜んでくださり祝福してくださいました。折に触れ、価値づけ勇気づけ励ましてくださいました。そのおかげで、困難なことがあっても前進しようとする力が湧いてきます。先生の教えを受けたたくさんの方々も同じような思いでいらっしゃるのではないでしょうか。

村井先生とご縁をいただけたこと、津田塾大学英文科と東京藝術大学楽理科の後輩としてご指導いただけたことに心から感謝申し上げます。これからも天国からお見守りくださいますよう、お導きくださいますようお願いいたします。そしていつかまた、お話の続きをお聞かせください。

（北海道教育大学准教授）

スイス訪問の際、ご尊父・長田新氏の墓標の前で
1996.8.14 撮影、画像提供：村井家

村井範子先生 略年譜・主要業績等一覧

【略年譜】[1]

1924 年（大正 13 年）

4 月 22 日、広島市にて父・長田新、母・ヨシ子の長女（第 4 子）として誕生[2]。吉田賢龍により「範子」と名付けられる。

1937 年（昭和 12 年）

広島高等師範学校附属小学校卒業。同校在学中、山本壽にピアノ演奏を師事。

1942 年（昭和 17 年）

広島県立第一高等女学校卒業。同校在学中、長橋八重子にピアノ演奏を師事。津田英学塾（翌年、津田塾専門学校に校名改称）予科入学[3]。母・ヨシ子死去。

1945 年（昭和 20 年）

津田塾専門学校英文科卒業。

1947 年（昭和 22 年）

この頃、運輸省広島鉄道局で約 1 年間翻訳官を務める。

1948 年（昭和 23 年）

村井実と結婚[4]。東京へ転居。

1949 年（昭和 24 年）

長男・成誕生[5]。この頃より東京藝術大学入学準備のため高田三郎（音楽理論）、城多又兵衛（ソルフェージュ）、室井摩耶子（ピアノ）に師事。

1950 年（昭和 25 年）

東京藝術大学音楽学部楽理科入学。同大にて辻荘一、遠山一行らの指導を受ける。また、同大在学中に清水脩に師事しドビュッシーを研究。

1954 年（昭和 29 年）

東京藝術大学音楽学部楽理科卒業[6]、同大音楽学部専攻科（現・大学院音楽研究科）入学。

1955 年（昭和 25 年）

東京藝術大学音楽学部専攻科修了（修了論文『クロード・ドビュッシィの歌曲について：詩と旋律の結びつきを中心に』[7]）。同大音楽学部副手となる。次男・純誕生[8]。

1956 年（昭和 31 年）

東京藝術大学音楽学部講師（音楽史担当）となる。

1958 年（昭和 33 年）

ロックフェラー財団より奨学金を得て米国ハーヴァード大学大学院へ留学、ジョン・ウォード教授らに師事し音楽史を研究。また、この間ダニエル・ピンカムにチェンバロ演奏を師事。

1960 年（昭和 35 年）

留学より帰国。帰路に欧州を周遊し、英国・ケンブリッジ大学にてジル・ヴラスト氏に IAML 入会を勧められる。帰国後 IAML 個人会員となる。

1961 年（昭和 36 年）

父・新死去。

1963 年（昭和 38 年）

フェリス女学院短期大学講師となる（1990 年まで）[9]。

1968 年（昭和 43 年）

遠山音楽図書館職員となる（1973 年まで）[10]。

1969 年（昭和 44 年）

東海大学短期大学部教授となる[11]。

1970 年（昭和 45 年）

フェリス女学院大学講師となる（1989 年まで）。
東海大学教養学部芸術学科講師を務める（本年のみ）[12]。

1972 年（昭和 47 年）

ボローニャにて IAML の年次大会に初めて参加。

1975 年（昭和 50 年）

音楽図書館協議会（MLAJ）理事会にて講演（講演題目「IAML モントリオール大会について」）[13]。

1977 年（昭和 52 年）

マインツでの IAML 年次大会に参加し、日本の音楽大学事情・図書館活動の問題点などについて報告。

1978 年（昭和 53 年）

リスボンでの IAML 年次大会に参加し、ハラルト・ヘックマン会長（当時）から日本支部設立の要請を受ける。帰国後、岸本宏子、遠山一行、松下鈞らと協議の上、支部設立の準備を行う。

1979 年（昭和 54 年）

7 月 9 日、IAML 日本支部設立。初代支部事務局長となる。

1983 年（昭和 58 年）

財団法人津田塾会評議員、津田ホール建築実行委員会委員となる（任期 4 年間）。

ご夫君・村井実氏とともに
1983 年 11 月、米国コネティカット州グリニッジにて
画像提供：村井家

1985 年（昭和 60 年）

東ベルリンでの IAML 年次大会に支部事務局長として参加、東京での IAML 大会開催の打診を受ける。

1986 年（昭和 61 年）

IAML 日本支部東京会議 1988 実行委員会が発足[14]、実行委員に加わる。

1988 年（昭和 63 年）

IAML 東京会議（年次大会）開催。

1990 年（平成 2 年）

フェリス女学院大学教授（音楽学部楽理学科主任）となる（1993 年まで）。

1993 年（平成 5 年）

フェリス女学院大学教授を定年退職、同大名誉教授となる。ヘルシンキでの IAML 年次大会に参加（最後の年次大会参加）。

1994 年（平成 6 年）

IAML 日本支部副支部長となる（1995 年まで）[15]。

1995 年（平成 7 年）

日本支部に新規活動基金として 100 万円を寄付[16]。

1997 年（平成 9 年）

フェリス女学院大学オープンカレッジ「世界の音楽・日本の音楽」の講師を務める（2004 年まで）[17]。

2004 年（平成 16 年）

自宅にて「M&E 音楽史研究会」主宰（2013 年まで）[18]。

2009 年（平成 21 年）

IAML 日本支部設立 30 周年記念シンポジウムに登壇。

2020 年（令和 2 年）

12 月 17 日、永眠。

【書籍】

（著作）

『音楽学研究物語：村井範子が語る日本における音楽学研究のあけぼのとその時代』（中西紗織共著. 芸術現代社, 2021）

（翻訳）

『音楽史』
（H.M.ミラー著；佐藤馨, 松前紀男共訳. 東海大学出版会, 1966）

『プレンティスホール音楽史シリーズ』（全 8 巻中、7 巻）
（東海大学出版会, 1969-1994）

・『4 古典派の音楽』
（R.G.ポーリィ著；藤江効子共訳. 1969）

・『8 東洋民族の音楽』
（W.P.マルム著；松前紀男共訳. 1971）

・『1 中世社会の音楽』
（A.スィー著；藤江効子共訳. 1972）

・『7 西洋民族の音楽』
（ブルノ・ネトゥル著；松前紀男, 藤江効子共訳. 1974）

・『3 バロックの音楽』
（C.V.パリスカ著；藤江効子共訳. 1975）

・『5 ロマン派の音楽』
（R.M.ロンイアー著；松前紀男, 佐藤馨, 藤江効子共訳. 1986）

・『2 ルネサンスの音楽』
（H・M・ブラウン著；藤江効子共訳. 1986）

『新音楽史』
（H.M.ミラー著；佐藤馨, 松前紀男共訳, 東海大学出版会, 1977）

『音楽用語定義集』
（ヨハンネス・ティンクトリス著；中世ルネサンス音楽史研究会訳, シンフォニア, 1979）
※中世ルネサンス音楽史研究会会員として翻訳に参加

『新音楽史 改訂版』
（H.M.ミラー著；佐藤馨, 松前紀男, 秋岡陽共訳, 東海大学出版会, 2000）

（シリーズ監修）

『ノートン・クリティカル・スコア・シリーズ』（全 5 巻）
（松前紀男共同監修, 東海大学出版会, 1979-1981）

・『モーツァルトの交響曲ト短調 K.550』
（ネイサン・ブローダー編；松前紀男訳. 1979）

・『シューマンの歌曲集：詩人の恋』
（アーサー・コーマー編；寺本まり子訳. 1980）

・『ショパンのプレリュード集：作品 28』
（トーマス・ヒギンズ編；松前紀男訳. 1980）

・『ベートーヴェンの交響曲第 5 番ハ短調』[19]
（エリオット・フォーブス編；福田達夫, 福田房子訳. 1981）

・『シューベルトの交響曲ロ短調：未完成』
（マーティン・チューシッド編；谷村晃訳. 1981）

【論文・記事】（翻訳を含む）

「印象主義とクロード・ドビュッシー（新人評論）」
（『フィルハーモニー』26(11), p.57-63, 1954.11）

「クロード・ドビュッシーのピアノ作品について」
（『フィルハーモニー』27(4), p.54-59, 1955.4）

「アメリカの音楽学」
（『音楽学』5(1), p.44-48, 1959.11）

「西洋音楽史地図及び註解」
（佐藤馨共著.『フェリス論叢』(9), p.74-87, 1964.4）

「勉強好き勉強ぎらい（座談会）」
（近藤正夫, 古川原, 根岸愛子, 谷川俊太郎共著[座談].『婦人之友』58(9), p.30-40, 1964.9）

「ジョン・ブルのパヴァーヌとガリヤードについて」
（『フェリス論叢』(11), p.65-71, 1967.4）

「音楽教育における唱法の変遷」
（『Tonica』6(6), p.10-15, 1967.7）

「音楽教育における記譜法の変遷」
（『Tonica』6(6), p.16-22, 1967.7）

「印象主義音楽の天才ドビュッシー」
（『ステレオ世界音楽全集 14』(1970.7, キングレコード）付属冊子, p.13-21）

「ドビュッシー フォーレ デュカス ビゼー オッフェンバック作品一覧年表」
（久納慶一, 黒田恭一共編. 同前, p44-45）

「婦人の余暇のための工夫：西ドイツ滞在の見聞から」
（『婦人と年少者』(24)(通巻 177), p.24-25, 1973.6）

「フィリップ・ドゥ・ヴィトリ著「アルス・ノヴァ」全訳」
（中世ルネサンス音楽史研究会訳；『音楽学』(19), p.39-54, 1974.6）
※中世ルネサンス音楽史研究会会員として翻訳に参加

「フランクの宗教音楽」
（『礼拝と音楽』(15), p.28-33, 1977.11）

「みゅうじっく・らいぶらり」（連載）
（『音楽の窓』10(12)1978.12-11(12)1979.12）

・「1 イアムルのこと」（10(12), p.4-5, 1978.12）
・「2 リスボンへん」（11(1), p.4-5, 1979.1）
・「3 リスボンへん」（11(2), p.4-5, 1979.2）
・「4 リスボンへん」（11(3), p.4-5, 1979.3）
・「5 リスボンへん」（11(4), p.15-17, 1979.4）
・「6 リスボンへん」（11(5), p.2-4, 1979.5）
・「7 マインツへん」（11(6), p.2-3, 1979.6）
・「8 マインツへん」（11(7), p.2-3, 1979.7）
・「9 マインツへん」（11(8), p.14-17, 1979.8）
・「10 マインツへん」（11(9), p.8-9, 1979.9）
・「11 マインツへん」（11(10), p.4-5, 1979.10）
・「12 ザルツブルクへん」（11(11), p.4-5, 1979.11）
・「13 ザルツブルクへん」（11(12), p.10-12, 1979.12）

「メンデルスゾーン：人とその作品」
（『礼拝と音楽』(21), p.4-11, 1979.5）

「Report on the Establishment of the Japanese Branch of IAML」
（『IAML Japanese Branch Newsletter』1(1), p.1, 1979.6）

「IAML とその日本支部」
（『IAML 日本支部 Newsletter』(1), p.2-3, 1982.8）

「Fontes Artis Musicae 創刊号より」
（『IAML 日本支部 Newsletter』(1), p.[12], 1982.8）

「モーツァルト：人とその作品」
（『礼拝と音楽』(36), p.16-21, 1983.2）

「IAML 日本支部設立のころ」
（『IAML 日本支部 Newsletter』(10), p.3-4, 1998.7）

「音楽学研究の道を歩む」
（津田塾大学創立 100 周年記念誌出版委員会編『未知への勇気：受け継がれる津田スピリット』（津田塾同窓会, 2000）p.3-4）

「遠山一行先生の思い出」
（『IAML 日本支部 Newsletter』(55), p.3-4, 2015.12）

【演奏会企画・構成】[20]
（いずれも渡辺淳子共同企画・構成、東京津田会主催）

「戦後 60 周年記念コンサート～世界の平和をねがうコンサート～」
（2005.7.16、於アルカディア市ヶ谷）

「世界の平和をねがうコンサート 2006」
（2006.7.22、於津田塾会本館（千駄ヶ谷）501 教室）

「世界の平和をねがうコンサート 2007」
（2007.7.7、津田塾会本館（千駄ヶ谷）501 教室）

「世界の平和をねがうコンサート 2008」
（2008.7.12、於アルカディア市ヶ谷）

「世界の平和をねがうコンサート 2009」
（2009.7.18、於アルカディア市ヶ谷）

「戦後 65 周年記念コンサート～世界の平和をねがうコンサート～」
（2010.7.24、於アルカディア市ヶ谷）

編註：
1: 略年譜中の記述は特記なき限り『音楽学研究物語』（芸術現代社, 2021）による。また、各種の主要業績は「国立国会図書館サーチ」（https://iss.ndl.go.jp/）などに収録の書誌情報のほか、一部現物確認も行ってまとめた。なお、本稿のインターネット上の情報源の閲覧日はすべて 2021 年 12 月 13 日である。
2: 人事興信所編『人事興信録[第 20 版]』（人事興信所, 1959）上巻, p.お 188 及び村井実[述]；森田尚人, 諏訪内敬司編『聞き書村井実回顧録：正続』（協同出版, 2015）p.55。
3: 津田塾大学津田梅子資料室のご教示による。
4: 村井実 前掲 p.353。
5: 前掲。
6: 卒業論文題目は、東京藝術大学附属図書館、同大音楽学部楽理科及び大学史史料室に問い合わせたが判明しなかった。ただし、村井先生は音楽学会関東支部第 2 回例会（1954.10.2）の「昭和 29 年度各大学優秀卒業論文発表会」で「ドビュッシーのピアノ曲について」の題目で発表を行っている（『音楽学』(2)（1956.11）p.55）。
7: 修了論文の題目は「楽理科卒業論文・音楽学専攻修士論文データベース」（http://fms.ms.geidai.ac.jp/fmi/iwp/cgi?-db=２．音楽学専攻修士論文&-loadframes）による。
8: 村井実 前掲。
9: 以下、フェリス女学院大学での職歴については秋岡陽氏にご教示頂いた（オープンカレッジを除く）。
10:日本近代音楽館編『遠山音楽図書館の二十年：1966～1986』（日本近代音楽館, 1988）p.102。
11:東海大学での教歴については同大学園史史料センターにご教示頂いた。ただし、同大短期大学部の退任時期や、村井氏が実際に授業を担当していたかは不明。
12:東海大学教養学部創立 20 周年記念誌編集委員会編『東海大学教養学部 20 年の記録：東海大学教養学部創立 20 周年』（東海大学教養学部, 1988）p.91。
13:音楽図書館協議会 40 年史編集委員会編著『日本の音楽図書館：音楽図書館協議会 40 年のあゆみ』（音楽図書館協議会, 2019）p.240。
14:前掲 p.252。
15:「日本支部の歴史」 http://www.iaml.jp/nihonsibu.html
16: 1994 年度までの 5 年間、村井先生が個人的に立て替えていた、支部から本部への拠出金のうち約半額について、支部による返済を免じたもの（藤堂雍子「会計報告」（『IAML 日本支部 Newsletter』(3), p.3-4, 1996.1））。
17:中西紗織氏のご教示による。
18:中西紗織氏のご教示による。
19:「訳者あとがき」p.221 に「シリーズ全体の監修者、松前紀男先生と村井範子先生」とあり。
20:2005、2008、2010 年の演奏会は中西紗織氏、そのほかは東京津田会関係者の方（匿名）に詳細をご教示頂いた。

（工藤哲朗編）

事務局だより

〇会費納入のお願い

2021 年 11 月に会費納入の書類を送付させていただきました。支部運営のため、できるだけ早い納入にご協力を賜りますようお願い申し上げます。

お問合せは、会計・野川（nogawa@tohomusic.ac.jp）までお願いいたします。

〇大会参加補助金の申請を募集中

2022 年の IAML 年次大会は、7 月 24～29 日にかけてチェコ・プラハにて開催の予定です。日本支部では、年次大会にはじめて参加する個人会員（図書館等職員並びに非常勤講師等の研究者）および団体会員の各機関所属メンバーを対象とした補助金制度を設けており、現在募集中です。応募締切は 4 月末日。詳細は支部まで電子メール（iamljp@j07.itscom.net）でお問合せください。

〇"Fontes Artis Musicae"で日本支部特集

IAML の機関誌"Fontes Artis Musicae"の 68 巻 3 号（2021 年 7-9 月号）に、IAML 日本支部の 40 周年を記念した特集が掲載されました。掲載論文は以下の通りです（タイトルはいずれも仮訳）。

・我々はどのように音楽コミュニティと協働できるのか：IAML 日本支部 40 周年に際して（伊藤真理）
・国際音楽文献目録日本支部（RILM 日本国内委員会）における近年の展開：その責務と将来（伊東辰彦）
・南葵音楽文庫のカミングス旧蔵コレクション（佐々木勉）
・1960 年代の日本の音楽図書館：芽生えの時代？（伊藤真理）
・日本におけるヨーロッパ中世・ルネサンス音楽研究の受容（宮崎晴代）

IAML 会員はデータベース Project MUSE 上で閲覧可能であるほか、特集の序文と各論文の要旨（日本語あり）は以下から誰でも閲覧可能です。
https://muse.jhu.edu/issue/46326

〇東京音楽大学が「伊福部昭コレクション」を受贈

2021 年 12 月 10 日、東京音楽大学が作曲家で同大学長だった伊福部昭（1914－2006）の作品資料 1,243 点を遺族・関係者から受贈したと明らかにしました。寄贈資料には楽譜、書籍、雑誌、録音・映像資料のほか、民族楽器なども含まれるとのことです。

この「伊福部昭コレクション」は東京音楽大学付属図書館で 2022 年度より整理・目録化が開始される予定で、当面の資料利用については事前連絡が必須とのことです。
https://tokyo-ondai-lib.jp/collection/ifukube/about/

〇デジタル楽譜サービスの導入

PC、タブレット等の情報端末から楽譜の閲覧が可能となるデジタル楽譜サービス「Henle Library Campus Edition」および「nkoda」について、国立音楽大学附属図書館と昭和音楽大学図書館がそれぞれ導入（の予定）を発表しました。

「Henle Library」では、ヘンレ社が出版し販売中の原典版楽譜の大多数を収録し、楽譜や付属テキストの閲覧、PDF ダウンロードや印刷ができるほか、運指やボウイングの選択表示、注釈の書き込み、メトロノーム、録音等の機能があるとのことです。

一方、「nkoda」はベーレンライター社、ブライトコプフ＆ヘルテル社、リコルディ社など約 100 社が参加するサービスで、こちらも閲覧機能のほかに注釈の書き込み・共有なども可能とのことです。
https://www.lib.kunitachi.ac.jp/news/news.aspx#news_211122_1
https://www.tosei-showa-music.ac.jp/press/release20220120.html

〇IAML 英国・アイルランド支部が"Encore21"の新バージョンを公開

2021 年 10 月 19 日、IAML 英国・アイルランド支部は"Encore21"の新バージョンを公開したことを発表しました。"Encore21"は両国内の図書館で貸出可能なオーケストラ、声楽の譜面約 9 万件の所在情報を提供する総合目録データベースで、英国図書館の支援のもと、同支部が構築しています。今回の新バージョンでは、目録データがオー

プンソースの図書館管理システム Koha に移行されたとのことです。
https://iamlukirl.wordpress.com/2021/10/19/sourcing-performance-materials-encore21-re-launch/

○RILM の Instagram アカウント開設

2021 年 7 月に Répertoire International de Littérature Musicale（RILM）の Instagram アカウント（rilm_music）が開設され、RILM 関連のデータベースに収録された様々な文献の紹介などを通して、活動の広報を行っています。現在、週 2～3 回程度の頻度で投稿が行われています。
https://www.rilm.org/news/2021/11/
※RILM の Instagram アカウント
https://www.instagram.com/rilm_music/

■編集後記■

今号では、日本支部創設メンバーのお一人で、2020 年 12 月に惜しくも亡くなられた村井範子先生を特集いたしました。ご自身の IAML での活動について、村井先生はリスボンでの大会（1978 年）について綴った文章の中で次のように記しています。

> そして私もまた、今やこのリスボンの地に世界中から集まった音楽と図書館の専門家たちとともに近い未来、あるいは遠い未来にまでわたっての、音楽を介しての世界中の人間のより親しいつながりと交わりの在り方を追求しようとしているのです。…私は、あるいは、これこそまさに…二十世紀後半の私たちにとっての新しくふさわしいヒューマニズムの高揚なのかもしれない、とも思ったのでした。
>
> （「みゅうじっく・らいぶらり 5　リスボンへん」『音楽の窓』11(4) p.17）

今号の村井範子先生特集にご寄稿頂いた追悼文や、先生のご略歴からは、先生がまさに上述の「音楽を介しての世界中の人間のより親しいつながりと交わり」のために生涯を通じて力を尽くしていらしたことが実感されました。そして、IAML 日本支部という場もまた、先生のご尽力の結実のひとつであり、先生なくしては当支部も今日存在しえなかったものと感じられます。そのような村井先生のご功績を後世へと伝えるうえで、今号が少しでも役立ちましたら、編集担当としては望外の幸いです。

今号の編集にあたっては、生前の村井先生とご交流のあった皆様に追悼文をお寄せ頂きました。ご多忙の中にもかかわらず、充実した内容の文章をお寄せ頂いたことに改めて深く感謝申し上げます。加えて、略年譜・主要業績等一覧の情報の収集にあたっては、村井家のご遺族のみなさまのほか、秋岡陽様、中西紗織様、国際文化会館図書室、津田塾大学津田梅子資料室、津田塾大学同窓会、東海大学学園史史料センター、東京藝術大学附属図書館、東京藝術大学大学史史料室、東京藝術大学音楽学部楽理科、フェリス女学院大学音楽学部同窓会（F グループ）などのみなさまにも多大のご協力を頂きました。末筆ながらここに記して御礼申し上げる次第です。

なお、次号では 2021 年の IAML オンライン大会参加記および支部第 70 回研究例会（講師：清水拓哉氏）の概要・傍聴記などを掲載予定です。（工藤）

Newsletter - 国際音楽資料情報協会日本支部
第 72 号
（2022 年 1 月 31 日発行）

国際音楽資料情報協会（IAML）日本支部
〒480-1197　愛知県長久手市片平 2-9
愛知淑徳大学人間情報学部伊藤真理研究室内
（担当：工藤）
http://www.iaml.jp